



DATA

名称 東京都慰霊堂
所在地 東京都墨田区横網 2 丁目 3-25
完成 昭和 5 年
設計者 伊東忠太

温故

知新

第 16 回

レトロ建築を歩く

東京都慰霊堂（旧震災記念堂）

大 正 12 年（1923 年）9 月 1 日に発生した関東大震災は、未曾有の被害をもたらした。

東京都慰霊堂（旧震災記念堂）は、震災による被害者のうち、身元不明とされた約 5 万 8 000 人の遭難者の御遺骨を納める霊堂として、震災 7 年後の昭和 5 年（1930 年）に完成した。

東京都慰霊堂が建っている、現在の都立横網町公園は、震災当時、陸軍の軍服を製造していた被服廠の跡地であり、公園造成中の空き地であった。

そのため、震災直後には近隣の多くの人々が避難してきたが、火災の炎が竜巻のように渦を巻く「火災旋風」が発生し、4 万人近くがこの地で焼死したといわれる。

この悲劇を風化させないため、そして遭難者の慰霊を目的として、この地に納骨堂・記念施設の建築が計画された。

当初は設計案の公開コンペが行なわれたが、結果としては採用されず、紆余曲折を経て、築地本願寺などの宗教建築物で知られる伊東忠太が設計を担当した。

建物自体は、当時はまだ貴重だった鉄筋コンクリートで造られ、耐震・耐火構造とされた。



内部は、キリスト教の教会でよく見られるバシリカ様式（長方形の外壁で囲まれ、内側に列柱が並ぶ古代ローマの建築様式）が取り入れられている

建物の各部に、忠太の建築特有の妖怪・幻獣の彫像が配置されている



本堂の外観は、日本の神社仏閣風のデザインとされたが、内部は、キリスト教会でよく見られる列柱が立ち並んだ「バシリカ様式」が用いられた。そして、本堂後方の三重の塔には、中国やインド風の様式が用いられるなど、多種多様な宗教的要素が取り入れられている。

地域も歴史も違う宗教様式を組み合わせ、建物全体を慰霊の場所としたところに、忠太の宗教的な公平性が表われている、といわれる。

また、建物の内外には、忠太建築の特徴とされる、妖怪・幻獣の像が多く配されている。

昭和23年からは、東京大空襲の身元不明の遺骨も納め、死亡者の霊を合祀。昭和26年9月1日より、現在の東京都慰霊堂に改称された。

